

シユスターマンの美学における美的経験の概念

現象学的次元の二重性と平凡／特別な美的経験とのつながり

李 惠 珍

本論文は、現代アメリカの哲学者、リチャード・シユスターマンの美学における最も中心的な概念、「美的経験」(aesthetic experience)を分析し、その意味を明確にする試みである。議論にあたり、この問題を主題的に論じた以下三篇の論考に焦点を当てる。

(1) 一九九七年に発表され、シユスターマンの「プラグマティズム美学」の時期を代表する美的経験論、「美的経験の終焉＝目的」(以下 EAE)⁽¹⁾。

(2) 「プラグマティズム美学」から「身体美学」(somaesthetics)への過渡期、二〇〇六年に書かれた論文、「美的経験——分析からエロスへ」(以下 AEAE)⁽²⁾。

(3) 二〇一二年に出版された書物、『身体を通して考える』(以下 TTB)⁽³⁾の第二章、「身体美学的な目覚めと生の芸術」(以下 APAL)⁽⁴⁾。これは彼の「身体美学」以降の美的経験論を代表する。

最初の(1)と最後の(3)とでは、十五年の隔たりがあり、前者が芸術を主題とした美的経験に焦点を当てているのに対し、後者が身体性の美学をテーマとしていることから、互いに関連性がないように思われるかもしれない⁽⁵⁾。しかし両者とも、日常的な生から得られる美的経験と、芸術の享受から得られる美的経験を峻別することに反対し、また、美的経

験の質や地位を変化しない静的なものとして理解することに反対するという基本的な立場を取る点で、究極的には同じ目標を指向していると考えられる。本論文は、このように（１）に代表されるプラグマティズム美学の時期における美的経験論と、（３）に代表される身体美学以降の最近の美的経験論とが、基本的には同一線上で発展していたことを示し、両者の関連を解明する。

以下、本論文は二節からなる。

第一節では上の（１）における議論とそれへのアイスマンガーによる批判、さらにシュスターマンによるその再批判（２）を検討する。本論文では特に、そこで最も重要となる美的経験の「現象学的（phenomenological）」な次元を中心に考察を進めることになる。第一節では、シュスターマンが、その次元における「現象学的」な要素と「認知的（cognitive）」な要素とをいかに捉えていたのかを明らかにする。

この現象学的次元における二つの要素を軸に、第二節では、最近の身体美学以降の美的経験論を論じる。具体的には、（３）における議論から〈特別な美的経験〉と〈平凡な美的経験〉という美的経験の二つの捉え方を取り上げ、その意味を明確にする。その上で、これら二種の美的経験に関して、第一節で見た現象学的要素と認知的要素とがいかに作用するのかを考察する。それにより、シュスターマンのプラグマティズム美学の時期における美的経験論が、身体美学以降の最近の議論といかなる点で接続し、いかなる点で異なるかを明らかにする。

かくして、美的経験という彼の美学における中心概念の内実が明らかになると同時に、プラグマティズム美学から身体美学へと一見大きく変貌するかに見える彼の美学を、一貫したものとして捉える糸口が得られるであろう。

第一節 シュスターマンの美的経験論における現象学的次元

1. 美的経験の四つの次元——一九九七年の論文から

シュスターマンはプラグマティズム美学の時期に書かれた一九九七年の論文(EAE)で、美的経験一般が、芸術作品の鑑賞経験と同様、四つの次元を持つとした。「価値評価的」「現象学的」「意味的」「画定的―規定的」の四次元である。

第一に、美的経験は、本質的に価値があり楽しいものである。これを〔美的経験の〕価値評価的(evaluative)次元と呼ぼう。第二に、美的経験は、生き生きと感じられ、主観的に味わわれるものである。そして情緒的に没頭させ、注意をその直接的な現れへと集中させ、そのことで、ありきたりの経験の平凡な流れから際立つ。これを〔美的経験の〕現象学的(phenomenological)次元と呼ぼう。第三に、美的経験は、意味のある経験であり、単なる感覚ではない。これを美的経験の意味的(semantic)次元と呼ぼう。(美的経験の情緒的な力と意味との二つからして、美的経験がどれほど変容的でありうるかがわかる。)第四に、美的経験は、芸術の区分と緊密に結びつき、芸術の本質的な目的を示すような、際立った―区分的な(distinctive)経験である。これを画定的―規定的(demarcational-definitional)次元と呼ぼう。(EAE 30)

シュスターマンによれば、これら四つの次元は、「共に両立できない」わけではない(ibid.)。しかし現代英米分析美学は、その一部の次元にのみ注目し、他の次元を捉えないので、美的経験を正しく理解できていないという。各次元がどの程度深く美的経験の全体に関与するのか、あるいは諸次元が「両立」する事態はいかなるものかなどについて、シュスターマンは

立ち入って論じていない。とはいえ、四つの次元の中で最も論争を呼び起こしたのは、二番目の現象学的次元であり、以下、本論文では特にこの次元を中心に論ずる。例えば、アイスマンはこの論文 (EAE) におけるシュスターマンの美的経験論が、現象学的な次元を重視するあまり、美的経験の「認識的説明」について「全く論じていない」と批判した⁶⁾。

アイスマンガーは、美的経験に対する二つの異なった考え方として、「現象学的 (phenomenological) な概念」と「認識的 (epistemic) な概念」との二つを分ける (AE 100)。アイスマンガーによると、前者、現象学的な概念は、「美的経験を持つということがいかなることか」に焦点を当てた上で、美的経験を「内観的に同定可能な」ものとして見る。それに対し後者、認識的概念は、美的とされるものを「推論的ではない仕方では知るようになる」事態を捉えようとする (ibid.)。結論として、アイスマンガーは、現象学的概念による説明には懐疑的であり、認識的概念による説明に軍配をあげる (AE 115)。そしてシュスターマンの美的経験論は、後者に全く触れていないと批判するのである。

2. 現象学的次元の二重性——二〇〇六年の論文から

このアイスマンガーによる批判を、シュスターマンは現象学的次元に注目する自身の美的経験論への批判として捉え返し、二〇〇六年の論文 (AEAE) で反論する。シュスターマンによれば、美的経験の現象学的次元は複雑であり、「二重性 (two-fold nature)」 (AEAE 219) を持つ。アイスマンガーは、現象学的概念にしたがった美的経験が、意味を欠いた完全に「主観的」なものだと考えていた。しかしシュスターマンにとって現象学的次元は、「主観的」な経験のみではなく、さらに何らかの「意図」や「意味」 (ibid.) をもあわせ持つのである。以下、このシュスターマンのいう現象学的次元の「二重性」を明確にしよう。

シュスターマンは、現象学的次元のうちにおいてであっても、より現象学的な要素と、より「認知的 (cognitive)」な要

素との二つがあると考える (AEAE 219, 220)。この認知的な要素は、内容的に、アイスミンガーのいう美的経験の認識的概念と重なる⁽⁷⁾。つまりシュスターマンによれば、主観的・直接的に感じられる美的経験の現象学的次元のうちにも、その感覚が「いかに」「感じ」られるのかという全面的に現象学的な要素だけではなく、それが「何の」経験なのかという認知的な要素もあるというのである。

……美的経験の現象学的な性格（「次元」）は、経験のなんらかの対象（*object*）（「何の」「*what*」）経験なのか）をも含意する。この対象は、美的経験の焦点をなし、ある特定の仕方（*way*）で経験される（この仕方が、経験のもつ特殊な「いかに」「*how*」）な⁽⁸⁾「感じ」「*feel*」と⁽⁹⁾（強調原文：AEAE 219）

現象学的次元は、美的経験の「対象」と「仕方」という二つの側面をもつ。いいかえれば、当の美的経験が「何の」経験なのか、そして「いかに」「感じ」られる経験なのか。この二つが、シュスターマンのいう現象学的次元の「二重性」である。この二重性は、一見すると、アイスミンガーが美的経験を説明するための「認識的な概念」と「現象学的な概念」としたものに似ている。しかし、ここでシュスターマンが述べているのは、あくまで美的経験における現象学的次元の内部にもまた、認知的な要素を探ることができるということである。いいかえれば、美的経験の現象学的次元の内部に、さらに現象学的―現象学的な美的経験と、現象学的―認知的な美的経験とが区別されることになる⁽⁸⁾。

このように議論が二重のものになるのは、シュスターマンが現象学的次元を、現象学的要素と認知的要素とが、つねに様々な程度で混じり合うものと捉えているからである。こうした程度の問題から推論すると、その極端な場合が考えられることになり、たとえば、美的経験において認知的要素が全く作用しないケースをも理論上想定しうるかもしれない。しかし、シュスターマンによれば、そのような認知的要素を全く欠いた状態は、単なる「識閥下の感覚（*subliminal aesthesis*）」にすぎず、

そもそも美的経験ではない。

……「識閥」下の感覚は、なるほど美的経験に影響を与える。しかし「識閥」下の感覚は、それ自身では、志向性および直接的な鑑賞的意識という厳密な意味における美的経験を構成しない。(AEAE 219)

「識閥」下の感覚」とは、その感覚が普段意識されない外部からの感覚である。それが美的経験になりえないということは、逆にいえば、シュスターマンにおける美的経験とは、つねに「意識」をもった主体が積極的にその経験の対象に注意を向け、感じ取ることにはかならない。いいかえれば、単なる感覚経験が美的経験になるには、広義における「何らかの意味の次元」(ibid.)を持たなければならないのである。

敷衍すれば、この引用文でいう「志向性」と「直接的な鑑賞的意識」とが、美的経験の現象学的次元を構成するということになる。そのうち、一方の「志向性」は、先の引用(AEAE 219)における『何の』経験なのか』と対応し、現象学的次元における「認知的」要素にあたると考えられる。他方の「直接的な鑑賞的意識」は、それが「いかに」「感じ」られるかを直接鑑賞(享受)すると同時にそれを意識することであり、現象学的次元におけるいっそう現象学的な要素にあたるであろう。「識閥」下の感覚」は、これら認知的要素も現象学的要素も欠いているのである。

以上をまとめると、シュスターマンにおける美的経験の現象学的次元には、現象学的な要素と認知的な要素とがあり、この二重性は、次節で考察する二つの美的経験にも関わる。議論を先取りすれば、以下で見る二つの美的経験のうち、「平凡な美的経験」は、以上見た二〇〇六年の論文(AEAE)における現象学的次元の中でも、単に現象学的要素のみが見られるようなもの(現象学的―現象学的な美的経験)と考えられる。他方、「特別な美的経験」は、認知的要素をいっそう強くともなった現象学的次元(現象学的―認知的な美的経験)と考えられるのである。

第二節 二つの美的経験——平凡な美的経験と特別な美的経験

身体美学以降に書かれた最近の二〇一二年の論考（TTB 所収：初出 APAL）で、シュスターマンは美的経験に関して、新たに二種類の区別を立てる。ただしシュスターマン自身は、美的経験の捉え方が二つあるということ述べているだけであり、その両者を「第一の考え方（the first conception）」、「第二の考え方（the second conception）」と呼んでいるにすぎない。しかしここでは、それぞれの考え方が主題としている美的経験を、筆者の言葉で、それぞれ〈平凡（ordinary）な美的経験〉〈特別（extraordinary）な美的経験〉と呼び、両者の特徴について論じることにする⁽⁹⁾。

両者を区別するのは、経験主体の身体が持つ感覚の「質（quality）」（TTB 303）や「強度（intensity）」（TTB 305）にある。以下、これら二つの美的経験のあり方を明確にし、両者が、前節で取り上げた美的経験における現象学的次元の二重性にかかわるかを考察しよう。

1. 平凡な美的経験

まず、シュスターマンは平凡な美的経験についていう。

日常の美学についての第一の考え方は、平凡なもの（the ordinary）を、特別なものとしてではなく、まさに平凡なものとして鑑賞することに断固焦点を当てる。その結果、この第一の種類の日常の美学において鑑賞される美的質は、強度ある（intense）質、あるいは強力な経験としては、特別な注目を引かないだろう。そうではなくそれは、たとえば曇った天気
の鑑賞に際し、単にその曇りを平凡で鈍い仕方で鑑賞するだけのようなものとなるだろう。そこに曇りについて

の、突然の壮麗なヴィジョンや特別の経験といったものが伴うことはない。(強調原文：TTB 303)

この引用によると、平凡な美的経験は、「平凡なもの」を、日常の平凡な仕方で感じ取ること(鑑賞すること)である。さらにシュスターマンは、この平凡な美的経験において、「平凡なものは、最も注意を欠き、習慣的で、無意識的な仕方では経験される」ともいい、それを特別な美的経験と対比する(TTB 304)。

しかし、もしも平凡な美的経験が、このように注意や意識を欠いた弱いものであるならば、なぜそれは、美的ではない単なる経験や感覚とは異なり、美的経験として認められるのか。その問いに答えるため、平凡な美的経験を、前節・2で示した美的経験における現象学的次元の二重性から考えたい。

前節で見た通り、美的経験における現象学的次元には、認知的要素と現象学的要素とがあり、さらに理論上は識閥下の感覚をも想定できた。なるほどシュスターマンは、平凡な美的経験について、「人は「平凡なものを」、その経験にかんする明確な意識を持つという意味では、美的に知覚することは全くない」(TTB 304)と述べる。だとすると、平凡な美的経験は、認知的要素をほとんど欠くことになる。しかしながら、そこで識閥下の感覚のみが残ると考えられているわけでもない。というのも、先の引用でシュスターマンは、「平凡なものを……『平凡なものとして』鑑賞する」(強調引用者)としていた。もしその際、識閥下の感覚のみしかないのであれば、その平凡なものを「鑑賞(appreciate)する」ことはできないからである。以上を踏まえれば、平凡な美的経験とは、識閥下の感覚を超え、現象学的な要素をもつものでありながら、いまだ認知的要素を完全には備えるに至っていないものと考えることができる。

2. 特別な美的経験

では、他方の特別な美的経験についてはどうだろうか。シュスターマンは次のようにいう。

日常の美学についての第二の考え方は、「美学」という語のもとの意味である知覚を強調する。のみならずこの考え方は、美的経験とは、意識的で集中した注意の問題であるという考えをも強調する。この注意は、本質的に、焦点化された (focused) ないし高揚した経験としてみずからを意識している。この経験の対象は、顕在的な注意をともしう意識の焦点 (the focus of explicit attentive consciousness) となり、そうしたものとして鑑賞される。(APAL 303)⁽⁹⁾

ここで特別な美的経験の考え方が、「知覚」を強調すると述べられていることからして、「意識の焦点」が、知覚に関わる現象学的次元に属することは明らかであろう。重要なのは、この特別な美的経験が、美的経験の主体の努力なしに得ることができるものではなく、そのためには、「意識の焦点」という積極的な努力が必要だという点である。美的経験の主体が積極的に努力するということは、その主体が美的経験の対象に意識的・志向的に向かうという事態である。こうした対象への意識の焦点化は、前節・2で引いた引用 (AEAE 219) でいう『何の』経験なのか」を重視する美的経験のあり方に対応する。いいかえれば、現象学的次元のうちでも、現象学的な要素を持ちながら、同時に認知的な要素を強く持つ美的経験に対応すると考えられる。

だが、こうした美的経験の特徴は、二〇世紀初頭のフォルマリスムの主張した「異化 (defamiliarization⁽¹⁾)」の概念と親近性を持つのではないか。シュスターマンはこのことを一方で認めつつも、自らの立場を「異化」との対比において次のように特徴づける。

「日常の美学についての第二の考え方は」、芸術がみずから追求せねばならないと感じていた支配的な論理にたいして、それに代わる代替案を与える。……その支配的論理とは、異化の方法、「異なものにする」という方法である。それはとりわけ、いっそう難しくすることによって行われる。……この特別な技法ないし「芸術の装置」は、「対象を『異化』(estrangement) し、形式を複雑化することによって」⁽⁷⁾、我々が見、感じるものについての、いっそう完全な知覚へと喚起する。……次の前提がこの論理を支えている。芸術の美的形式は、難しいものでなければ、事物についての知覚をいっそう意識的で明確にするのに必要な、長時間の注意を強いることができないということである。日常の美学の醒めた意識のヴァージョン（「日常の美学についての第二の考え方」）は、自覚、知覚、そして感覚において、高級芸術のよそよそしい難しさや人々を疎外するエリート主義なしに、同様の変容的強度を提供する。(TTB 304-305)

「異化」とは、とりわけ意図的に経験の対象を理解しにくいものにし、異質なものとすることによって、見る人が長い間関心を注ぎつつ作品を鑑賞するようにさせることである。

シュスターマンもいう通り、こうした「異化」は、とりわけ「現代のアート」で評価され、そこにあってアーティストの芸術的能力は、異化の仕方の巧拙によって評価された (APAL 6) ⁽⁸⁾。

ではなぜシュスターマンは「異化」のエリート主義を批判するのか。それは「異化」が美的経験をその他の経験から峻別するからである。むしろ彼は通常の経験を「改善 (melioration)」することこそ、美的経験の特徴であるという。

私は「日常の美学についての」第二の「考え方の」方が、美学にとってはより興味深く、展望があると考える。そのことは特に、美学を改善的なものとして (melioristically) 捉えるときよくあてはまる。すなわち美学とは、いっそう豊かで報われることの多い美的経験を提供することによって、生を豊かにすることを目指す学問領域だと考えるときであ

る。そのような見方をとるならば、平凡な対象や出来事を美的に鑑賞することは、それらについての知覚を鋭くするのに役立つことになる。それによって、平凡な対象や出来事が提供しうる、最も豊かな経験と、最も啓蒙的な理解を引き出すことができる。(TTB 304)

いいかえれば、特別な美的経験は、「豊かで報われることの多い美的経験」をもたらすがゆえに私たちの「生」を改善する。そうした知覚の鍛錬を通じて、人は以前は何とも思わなかった平凡な日常のできごとを、特別な意味を持つものとして味わうようになり、生を豊かにできるのである^[14]。

従って、特別な美的経験は通常の経験を「変容 (transfiguration)」するところに成り立つ。

日常の美学についての第二の考え方は、平凡な対象や陳腐な体験を、いっそうの強度をもつ知覚経験へと変容することにかかわる。この変容された知覚経験を特徴づけるのは、明示的で、高揚した、鑑賞的な (appreciative) 「対象の価値を認識する」意識である。この意識のおかげで、我々は平凡なものについての、特別な経験や知覚を得ることができる。この特別な経験や知覚は、「平凡な事物についてのものである」にもかかわらず、その平凡な事物を見たり行ったりする平凡な仕方 (鈍く、単調で、曖昧で、機械的などという意味で平凡な仕方) を超越してしまう。(TTB 305)

「変容」とは、日常生活の平凡な経験や対象が、単なる平凡な仕方による経験から、特別に経験される事態へと移行することである。この変容により、平凡な美的経験は、特別な美的経験になる。その点からすれば、変容は、平凡な美的経験と特別な美的経験の両者にまたがる、ないし両者を架橋するものといえよう。本節・1で見た通り、平凡な美的経験は、単なる識閥下の感覚ではなく、弱い程度であれ現象学的な要素をもっていた。さらに本節・2で見た通り、特別な美的経験も、

知覚にかかわる現象学的な次元に属し、現象学的な要素を明らかにもっていた。したがって変容は、まずは現象学的な要素と関係すると考えられる。

では、そこからいかにして特別な美的経験へと移行するのか。上の引用における「平凡な仕方」による経験と「特別な経験」との対比を通じて、前者から後者への移行、つまり平凡な美的経験から特別な美的経験への変容がどのようなものであるかを明確にしよう。それによりまた、以上のような特別な美的経験のあり方についても、要約的に示すことが出来るであろう。具体的には、上の引用で「平凡な仕方」による経験の形容として用いられている、「鈍く、単調で、曖昧で、機械的な」という四つの形容詞の各々を手がかりに考えたい。

第一に、刺激の程度における対比がある。「平凡な仕方」による経験は、ただ「鈍く」感じられるにすぎない。それに対し「特別な経験」は、「強度ある質」(TTB 303: 本稿7頁)の経験であり、強い刺激を与える。なるほど「特別な経験」にしても、「平凡な仕方」の経験同様、ある「感じ」(AEE 219: 本稿5頁)を与えるのだが、それがことさら強い。つまり変容とは、第一に、鈍い感じの経験が、強く刺激的な経験へと変わることである。

第二に、「平凡な仕方」による経験は、「単調」にしか把握できない。それに反し「特別な経験」は、「高揚した (heightened)」経験である。「高揚した」の語は、先の引用 (APAL 303: 本稿9頁)でも明確な「意識の焦点」を示していた。したがって変容は、第二に、このような明確な意識への高揚を含む。

第三に、「平凡な仕方」による経験は、「曖昧」なままに留まる。それに反して「特別な経験」は、「明示的」とされる。この差異は、認知的要素に関するものと考えられよう。経験の内容は、習慣的で平凡な生活の中では曖昧だが、変容された特別な美的経験においては、認知的に鮮明に捉えられるのである。

第四に、「平凡な仕方」による経験は、ただ「機械的」に使われるにすぎない。なるほどそれは、習慣的に毎日を経験すること、安心感を与えたり、素早い仕事の処理を可能にするかもしれない。まさにそれが「機械的」ということであろう。

それに反し「特別な経験」は、「鑑賞的 (appreciative)」である。つまり普段とは異なる特別な価値を持つものとして経験を楽しみ、対象の価値を認識するのである。

以上をまとめれば、平凡な美的経験も特別な美的経験も、当然、現象学的な要素を備えているが、一方の平凡な美的経験は、鈍く単調で、認知的要素を曖昧にししか備えていない。それに対し、他方の特別な美的経験は、明確な意識へと高揚した強い経験であり、認知的要素が鮮明に捉えられるのである。

結論

以上、本論文において、シュスターマンの美的経験概念を検討した結果明らかになったのは、第一に、彼がプラグマティズムの美学の時期に書いた論文 (EAF, AEAF) で提出した美的経験の四つの次元のうち、現象学的次元を、さらに現象学的でありつつ認知的な要素をもつ場合と、主として現象学的な要素のみを持つ場合との二重性から理解していた点である。

第二に、身体美学以降の時期に書かれた論考 (TTB, APAL) でも、平凡な美的経験と特別な美的経験にかんして、慣れや習慣を特徴とする平凡な美的経験には、主として現象学的な要素のみが関わるが、特別な美的経験には、現象学的要素に加えて、認知的要素が明示的に関わるとされた。かくして本論文は、シュスターマンの美学の中心概念である美的経験にかんして、プラグマティズム美学の時期と身体美学以降の時期とが、現象学的な次元の観点から見ると、一貫して現象学的要素と認知的要素との二重性を考慮しており、その点で連続していることを示した。

こうした見地から、身体美学以降の論考に現れた変容や異化などが、平凡な美的経験と特別な美的経験相互の関係にいかにかかわるかをより深く検討し、それを現象学的次元の二重性といっそう密接に関わらせて論ずることで、シュスターマンの美的経験概念の全体をさらに精査することもできよう。

彼はたとえば、第一節・1で引いた一九九七年の論文からの引用でも、すでに「変容」の概念を用いていた。すなわち、「美的経験の情緒のな力と意味との二つからして、美的経験がどれほど変容的でありうるかがわかる」（強調引用者：EAE 30）としていたのである。これは美的経験の四つの次元のうち、現象学的次元（「情緒のな力」と意味的次元（「意味」）をまとめたものといってよい。そこからすれば、変容には、現象学的次元と意味的次元の両者が混じり合うとも考えられる。とはいえ、ここでシュスターマンがいう意味的次元とは、何かを了解する次元であることからすれば、それは現象学的次元の認知的要素に該当するとも整理できる。そうすると現象学的次元は、意味的次元（の一部）を認知的要素として含むものとなるのか⁽⁵⁾。

こうしたシュスターマンの用語法、概念のより詳しい吟味を含め、これらの問題は今後の課題としたい。

本稿は第六十三回美学会全国大会（二〇一二年十月七日 京都大学）における口頭発表原稿を、加筆修正したものである。

註

- (1) Richard Shusterman, “The End of Aesthetic Experience,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 55: 1 (Winter, 1997): 29-41.
- (2) Idem, “Aesthetic Experience: From Analysis to Eros,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 64:2 (Spring 2006: 217-229.
- (3) Idem, *Thinking Through The Body: Essays in Somaesthetics*, New York: Cambridge University Press, 2012.
- (4) Idem, “Somaesthetic Awakening and the Art of Living,” in TTB. 同章の初出で、idem, “Aesthetics as Philosophy of Art and

Life: Reflections on Pan Gongkai", Shishoka. Beijing: The China Academy of Art, 2011. なお TTB 所収の同章からの引用にあたっては、この初出論文 (APAL) を併用する。

- (5) 例えば樋口聡は、シュスターマンの「somaesthetics」を限定的に捉え、「鋭敏な感覚を持った身体、感覚の機能が高められた身体」を目指す学問とする。樋口はそれを「身体感性論」と訳し、美学の問題を扱うプラグマティズムの美学とは、あくまで別のものと位置づける (樋口聡、『身体教育の思想』、勁草書房、二〇〇五、一五〇頁参照)。しかしシュスターマンは、身体美学においてなるほど身体性を強調するものの、それを美学と全く無関係なものとしたわけではない。シュスターマンは、身体を「感覚＝美的な鑑賞 (感性) (sensory aesthetic appreciation (aesthesis))」および「創造的な自己形成 (creative self-fashioning)」の場としており、そこには経験を美的に味わうことや身体の美的な振舞い方が含まれる (Richard Shusterman, *Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art*, 2nd ed. New York: Rowman and Littlefield, 2000, p. 267)。それは樋口のいうような、単なる「知覚の正確さを広げること」(樋口『身体教育の思想』、p. 15) のみを指すわけではない。以下本論で示すように、上記の「身体美学」以降に書かれた (3) の論文で、シュスターマンが身体美学の枠で美的経験を論じていることは、樋口のような誤解に対する有効な答えとなろう。さらに本論文の全体で行うように、(1) (3) 期を一貫する美的経験の「現象学的次元」の複雑な有り様を整理することで、シュスターマンの「身体美学 (somaesthetics)」における「aesthetics」が、単なる「鋭敏な感覚」や「知覚の正確さ」を備えることには尽きないことはより明確になると考える。

- (6) Gary Iseminger, "Aesthetic Experience," *The Oxford Handbook of Aesthetics*, ed. Jerrold Levinson, New York: Oxford University Press, 2003, p. 112. 以下 AE。

- (7) アイスミンガーの「認識的概念」は、人の心の状態に適しているので、シュスターマンのいう「認知的」に属するものと考えてよい。シュスターマンは時に「認識的」と「認知的」とを使い分けるが (e.g., Richard Shusterman, "Affective

Cognition: From Pragmatism to Somaesthetics,” *Intellectica*, Association pour la Recherche Cognitive, 2013, pp. 49-68) 両者の区別は本論文の議論には直接関係しない。それゆえ本論文では、アイスマンガーの発言を引く場合を除き、「認知的」の語で統一する。なおシュスターマンの「認知的」についてはさらに、Richard Shusterman, *Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life*, New York: Routledge, 1997, pp. 158, 167 参照。

- (8) このアイスマンガーのような誤解が生じてしまう背景として、シュスターマンが四つの次元のそれぞれを、再び両義的に使っているという事実を指摘できる。例えば、シュスターマンは「意味的次元」を、一方では「象徴的再現 (symbolic representation)」(EAE 35) などを読み取るようにしながら、他方では「直接的な意味 (immediate meaning)」が「意味ある仕方では経験される (meaningfully experienced)」際の意味を指すものともしている (EAE 31)。そして彼は、前者のようなタイプの意味論的次元のみを強調する論者 (ゲッドマン、ダントー) を批判的に論じた。それゆえアイスマンガーのように、シュスターマンは、認識的概念による説明を全て無視したとする誤解が生じたのである。シュスターマンは、一つの美的経験の内に四つの次元が共にあると述べている。そこからすれば、意味論的次元と現象学的次元も、各次元同士で重なる部分があると推測することもできよう。下註15も参照。

- (9) 以下で引く本稿12頁の引用にみられる通り、シュスターマン自身は、経験の「平凡な仕方 (the ordinary way)」および「特別な経験 (a special experience)」といういい方を用いている。筆者による呼称は、それらをいっそう明確化し、整理したものである。

- (10) この部分はより明確な初出論文 (上註3) から引いた。TTB 303 に該当する。

- (11) 内容からいって、この語の訳としては「脱親密化」も考えられるが、本論文では「異化」で統一する。なおシュスターマンは、次の引用で「estrangle (異化する)」の語も用いている。

- (12) Viktor Shklovsky, “Art as Device,” in *Theory of Prose*, trans. Benjamin Sher, Normal, IL: Dalkey Archive Press, 1991, p. 6.

(13) なおシュスターマンは、この異化の側面が過度に使われてしまう危険についても記している。彼は現代アートがもっぱら「異化」の効果を狙うあまり、「醜や (ugly)」「一辺倒になりつつある事態を遺憾に思い、それが美的経験に取り入れられる事態を警戒している (APAL 9)。

(14) 興味深いのは、シュスターマンがこの「改善 (melioration)」に関して、さらに社会的な側面を念頭に置いていることである。彼は身体美学に関する別の論考で、体と社会を作り直すことにより、身体に関する存在論的・生理学的・社会的な諸事実を変化させる、「改善的努力 (meliorative efforts)」について語っている (Richard Shusterman, *Body Consciousness*, New York: Cambridge Press, 2009, p. 24)。本論文で指摘した美的経験における生の改善も同様の身分を持つとするならば、そこにみずらの社会的事実を変えるという社会的な側面が見えてくる。ただし本論文ではこの興味深い論点について立ち入る余裕はない。

(15) 上註 8でも述べたように、意味的次元には、厳密に言えば二つの事柄が含まれる。筆者の言葉で整理すれば、言語や象徴などの記号を読み取るような場合の、意味論的文脈における「意味」と、体験により直接感じられる、現象学的文脈における「意味」の二つである。後者の側面は、現象学的次元の認知的要素と重なるものと整理できるかもしれない。また先にみたとおり、シュスターマンは二〇〇六年の論文 (AEAE) でも、「何らかの意味の次元」(219)について語っていた (本稿 6 頁に引用)。本論文では、この「何らかの意味の次元」が、さしあたり現象学的次元の現象学的要素を指すものと考えた。だがそれは、さらに認知的要素とどう関係するのか。そしてもしもそれが一九九七年の論文 (EAE) における意味的次元に該当するものとすれば、やはりここでも現象学的次元の中に、意味的次元 (の一部) が混じり合っているのか。いずれにせよ、このように一つの次元の内にさらに複数の側面・要素が含まれるのは、もともと美的経験の四つの次元が、まずは従来の美学における美的経験論を批判するために設定されたために、従来の議論に引きずられており、彼自身の主張と必ずしも十分整合しないためであると推測できる。